第17号
発行
釧路湖陵同窓会
発行日
昭和63年3月3日
印刷所
藤田印刷KK

くまざさ

一九八八年にはばたく
郷土と共に育つ我が湖陵

釧路湖陵同窓会
会長 長内 宏

厳冬の中で一九八八年の新春は明けた。肌をさす寒気はすがすがしさでもある。

今年は母校の校舎移転着工への第一歩の年となる。今や湖陵ケ丘も時代の流れと共に大きく変貌せんとして居る。しかし大正二年、釧中として開校、湖陵へと引き継がれた伝統は愈々磨きをかけられ、七十五星霜、幾多の英才を育んだ母校は、郷土の発展と共に歩んで来た。母校の歴史は即ち釧路の歴史と言っても過言ではない。

今春卒業の四十期生は正に一九八八年にはばたく事になる。理想と希望に満ちて将来に向け精進を重ねる事程、尊く感動に溢れるものはない。

湖陵同窓会も若さに燃える新人類の参加こそ、発展の原動力としてとらえ且つ期待する所である。

昨年、札幌湖陵会が拡大再編成で出発した事は御承知の如くであるが、一方東京でも支部結成に向け目下胎動中である。又以前より活動中の十勝支部に加え、各地で同窓生による母校支援並びに親睦の和が拡がりつつあり、今や全国的規模で進行中である。

緑ケ岡に聳える湖陵新校舎、そのユニークさは全道的に注目を浴びて居る。それにもまして隣接する二十一世紀のデザインを誇る我が同窓会館が市民の足をとめる。内部は湖陵の伝統の息吹と先達の教えに溢れ、時折ホールでは在校生が先輩の心の叫びに酔いしれて居る。一方他講堂では湖陵文化の華が咲き誇り、若人の歓声がこだまする。そして時には同窓生一同による乾盃の大合唱が……。新春こんな夢をみたが、これぞ正しく我が同窓会の実現目標そのものなのである。

釧路湖陵高等学校
学校長 町田 康雄

湖陵は今、「大湖陵」をめざして邁進を続けております。

本年は戊辰、亢竜飛翔の輝ける年であります。本校応援歌No.1に、

「湖陵に長し七十年
夢よりさめて蛟竜は
今黒雲を渦巻きて
栄えあるこの日うそぶかん」

とありますが、私は初春の始業式に臨み、生徒諸君に次のように述べました。

「英才豊かな湖陵生を干支の竜に例えるならば、

・『竜は、一寸にして昇天の気あり』の諺どおり

・名門湖陵という『登竜門』に入り、大きくなって

・今まさに昇り龍『亢竜が飛翔せんとす』そして姿は雄々しく、実に頼もしい限りだ。先輩から受け継いだ素晴らしい歌を歌って、さあ、元気にゆこう!」

先輩から営々とうけついできた比類なき伝統の下、今、新しい伝統湖陵文化が創造されつつある。「温故知新」の精神に則り、先達を常に崇愛しつつも、誠愛勇の校訓の下で、新しき息吹を湖陵の伝統に注入し、「大湖陵」への飛躍が着実に図られている。懸案の校舎改築もその全容が見え、湖陵文化を誇り得る湖陵ギャラリー、湖陵文庫の設置、中庭の野外音楽ステージ、春採湖を一望できる展望室、そして大時計塔等々、学校関係者の叡知を集結し、「大湖陵」に相応しい校舎をお願いしており、全道に誇り得るものと確信します。

素晴らしい伝統と、素晴らしい新校舎、この実現にむけて同窓生の皆様からお寄せいただいた御期待と御厚志に深く感謝申し上げ、郷土釧路発展のために「共に進まん勇ましく」の心で、今後共全力を傾注することをお誓い致します。

学園だより '87

同窓生の皆さま、いかがお過しですか。

「くまざさ」十七号発行に当り、この一年間を概略ふり返ってみたいと思います。

三月十日、昭和二十四年三月新制高校第一回卒業生を送り出して以来、丁度四十回目の卒業式を迎えようとしています。

この時期、連日新聞紙上で進学合格者の発表が相次ぎ、受験生は勿論、父母、教師共ども一喜一憂の毎日が続きます。

進路指導部のまとめによると、男子は、国公立大志望者数はほぼ同数ではあるが、私大志望者が激増。国公立大のボーダー上昇のため、安全を考えた受験生心理の表われであろう。女子の特徴は、国公立大・私大共に大巾増。国公立大については、共通一次が好成績であったこと、私大については、全国的に就職状況が短大から四年制大卒に有利にはたらいていること等々が増加につながっている。しかし、短大志望者が昨年と同様変化がないところをみると、短大・四年制併願が多いのではないか。

公務員、一般企業への就職については、経済不況が底をつき、やや明るさを取り戻したと言われるものの相変らず就職難、希望者が少ない本校も例外ではない。

●進学志望者の受験校（延べ数）

	男子	女子	合計
国公立大	281(293)	113(63)	394(356)
私立大	343(163)	121(59)	464(222)
短大	7(3)	156(166)	163(169)
各種専門学校	16(15)	51(48)	67(63)
合計	647(474)	441(336)	1088(810)

1人当受験校 2.6(2.0)

（ ）内は昨年度

●卒業生の動向

	進学希望	就職希望	家事・自営	合計
男子	238	9(9)	2	249
女子	149	19(17)	0	168
合計	387	28(26)	2	417

（ ）内は就職内定者

以上が担当の分析であるが、いづれにしても学習の成果が好結果に結びつき、一人でも多く笑顔で卒業してほしいものです。

一方、クラブ関係の活動状況を概観すると、高体（野）連、高文連、団体、選抜大会など全道大会に参加したクラブ数は延べ二八部。就中、野球部の甲子園出場一歩手前での敗退は、同窓生の皆さんにとっても痛恨の極みだったのではないでしょうか。

北海道を舞台に展開された全国高校総体をはじめ、各種全国大会に出場したクラブ・個人は次の通りです。

・体操（太田菜々〈2年〉、全日本ジュニア新体操選手権）
・羽根球（木村ゆかり〈3年〉、斉藤寛子〈3年〉、高校総体）
・陸上（平川敦子〈3年〉、高校総体、団体、北海道・極東ソ連親善、主として800M）
・フィギュア（野沢絵里子〈2年〉、高校総体、団体）
・ハンドボール（高校総体3度目、選抜大会連続7回、8度目）
・アイスホッケー（千里直之〈2年〉、世界ジュニア選手権日本代表）
・放送（熊沢裕美子〈2年〉、NHK高文連放送コンテスト）
・囲碁（檜沢仁宏（2年）、全国高校選手権、連続2回）

以上活躍ぶりの一端をご紹介しました。道内のいわゆる進学校と称される高校の中で、本校のクラブ活動はかなり活発な部類に入ると考えていますが、このことは文武両道を教育方針の底流に掲げる本校にとって喜ばしい限りです。

母校の改築問題については、ご承知の通り同窓生を含めた関係各位のご盡力により、緑ケ岡に移轉改築が本決りとなり、「良かったですね、いつ完成の予定ですか」と尋ねられることが日増しに多くなり、街のちょっとした話題にもなっています。完成の目途はともかく、全体の配置や内部の詳細の具体化など急がなければならない段階を迎えていると言えます。

紙面の都合もあり、やや片寄った内容の報告となりましたが、今年度も多忙な一年間が過ぎようとしています。

同窓生の皆さま、今後とも母校のため、後輩のためによろしくお願いいたします。

（文責　湖陵四期・和田信幸）

太陽のように明るく暖かい
真心で良い品をより安く
ご奉仕するセオチェーン

営業品目
●食料品●日用品●衣料品●軽食堂

セオ

妹尾商店　釧路市新橋大通1丁目　☎25－5345
新富士ストアー　釧路市新富士駅前　☎51－3467
愛国ストアー　釧路市愛国37番地　☎36－4295
白樺ストアー　釧路市白樺台1丁目　☎91－5423
昭園ストアー　釧路市昭和190番地　☎51－8853

妹尾　継男（湖陵4期）

わが青春は…

「冬の旅」全曲

湖陵二期　木内　周治

戦争、敗戦、戦後と、我が国の歴史を大きく塗りかえていった時代に、私達は釧中に入学し、湖陵を巣立ったのです。戦後の混乱から立ち直りかけた昭和二十四年、私達は高校の三年生でありました。

軍国主義から一変しての民主主義。世相はその反動で、外国ものの映画が上映され、映画館は連日の満員札止め。喫茶店には、オペラの「アリア」や、外国の民謡などが店内に流れ、私達には、見るもの聞くものすべてが、めずらしく、かつ、新鮮な文化でありました。

ある日、友人のH君の家に遊びに行くと、室内には所狭しとレコードが置いてあり、クラシックから映画音楽、ポピュラーまで、巾広い彼の音楽への傾倒は、当時としては、まことにハイカラであり、私の目にはH君がシャレたモダンボーイに映ったものでした。

週に一、二度はH君宅を訪問し、レコードを聴かせてもらうようになると、私は中でも、シューベルトの「冬の旅」が大好きになってゆきました。

私は或るとき、思い切って「冬の旅」をゆずってもらえないかと相談を持ちかけました。H君がレコード収集のマニアであり、大事にしていた曲であったので、ことわられると思いきや、案に相違して、「いいよ」と簡単に言うのです。恐る恐る代金はときくと、三千円だというのです。私は飛び上らんばかりに喜んだのもつかの間、翌日からは古本を売ったり、父から無断借用したり(在学中の後輩にまねられると困るが)して、漸く、大金の三千円を工面することができたのです。

晴れて「冬の旅」全曲を所有できたことが嬉しくて、私は学校の授業が終るのを待ちかねるようにして家に飛んで帰り、すぐに「冬の旅」のレコードに聴き入る毎日が続きました。

このようにして、丁度、砂漠で見つけた泉のように、新しい文化への私の渇きは、「冬の旅」全曲によって癒されて行ったように思うのです。

演劇に青春を

湖陵十一期　石井東洋彦

湖陵に入学して間もなく、何のためらいもなくーというよりは、深く考えることなく、演劇部を訪ねていた。とりたてて芝居に対する興味が大きかったわけでもなく先輩に知っている人がいたわけでもない。ただ、「高校生活の中で何かクラブ活動をしたい」という気持ちが強かったことには間違いなく、スポーツが得手でない自分としては、学芸会の延長くらいの軽い気持ちで入部させてもらったような気がする。

部員が少なかったおかげで、早速コンクールに出す芝居で役がふり当てられ、練習が始まった。

清水彰作「鴉」。高校生の性に対する興味、不安など心の揺れを描いた作品で、三十年も前の当時としては、かなり大胆なテーマではなかったろうか。

毎晩遅くまでの練習、そして大道具、小道具づくり。つらかったとか、苦しかったとかいうことは何ひとつ思い出せない。今だからかも知れないが…。先輩や同期の仲間たちと一緒にいることが、とにかく楽しく、力を合わせて一つのものをつくり上げる喜びを体で知った。

見事、地区代表になり、札幌での全道大会の舞台を踏んだ。幕が下りた時の感動に、やみつきになりそうな予感を覚えた。

新しい芝居をもって、刑務所慰問もした。前科のある父親の役で受刑者の反応に胸がしめつけられた。そんな気持ちのまま臨んだ秋の演劇祭では、審査員が「新派だ」と評した。意味はわかっていたがその言い方に、何かわりきれないものが残った。

結局、一年だけの演劇部員だったが、この経験が我が人生に及ぼした影響の大きさは計り知れない。

三十数年たった今、あの時の先輩部員が同じ市教委に、そして白糠町教委にいて、顔を合わせる。そんな時、青春が鮮やかによみがえってくる。

真心伝えたい…御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

釧路シーサイドホテル

黒滝恵一(湖陵14期)

〒085 釧路市南大通り5丁目1－1

ご予約・お問い合せは(0154)41－1717

各地 同窓会紹介と近況報告

東京だより

○在京釧中会

四六年から始まったこの集まりも、六十年には会則もできた。会員は表のようである。

釧中卒業年	人数
1	1
2	6
3	1
4	3
7	6
8	1
9	1
10	4
13	1
計	24

定例会も、この五月には三三回になる。「回想と躍進」と題する会誌も既に一五号を数えた。俳句の集まりも三十回なった。卒業とか喜寿記念の文集や、句集の出版とか、釣りや野鳥の観察など多彩な世界に生命をもやしておられるかたなど、それぞれ人生を豊かに楽しんでおられる。

（釧中七期　永井保記）

○釧中第十回卒業生の近況

私共は昭和二年の卒業で六十余年たったので所謂老境に入った訳です。まだお互いに元気のよい頃は年に一回位集って懇親会を開いたが、この頃は開いていない。然し有志の者は一度の釧路会に出席して郷土のかおりを味わっている。十三名の内元気なもの七名他の六名は体調不調です。雨の日も風の日も渡って通学した幣舞橋、霧の日の霧笛信号はまだ脳裏にきざまれている。（竹ケ原輔之夫記）

○いちご会

会員は二六名みんなそれぞれ一病息災、現役のもの七～八名あとは上手に働いてきたらしく悠々としている。例会には佐藤慶二先生が必ずご出席になられ悪童連の行状を愛情を込めてスッパ抜いて下さる。ゴルフ会、飲み会など適当に楽しんでいる。

（釧中十五期・梅津正隆記）

○湖陵二七会

「青春と友情の再確認」と銘うって開催された「三五周年東京大会」は百数十名の会員と多くの恩師のご出席をいただき、大成功のうちに次回を約束して終った。ふれあいを楽しみ、語り合ったことは明日へのエネルギー源となった。

（湖陵四期・岩崎　隆記）

友情を深め愉快に
札幌湖陵会の現状

六十二年二月に新発足した「札幌湖陵会」の定期総会が十一月二十八日開かれた。母校町田校長、長内湖陵同窓会長はじめ湖陵で教鞭をとられた恩師を迎え、四百人が出席、西條会長の所信表明に続いて、事業計画案などを承認の後当番期湖陵四、五期の趣向をこらした抽選会など盛会であった。

会場の席は同期ごとにまとめられ、大先輩の隣りに若い後輩が座るなど工夫されている。懐かしい会合に手を取り談笑する姿、恩師と共に写真を撮るほほえましさ、バンド演奏で歌う者、踊るカップルも見られ和やかなひと時であった。

来年から総会は毎年六月第三土曜日と決め、会報を逐次発行することが申し合わされた。この日、配布の「さっぽろ湖陵」創刊号は本文十ページ、新会員（十八－二十一期）と恩師（四十九人）の名簿四ページを付したもので、釧中一期佐藤栄一氏の健在ぶりを始め、三ページに及ぶ各期のミニ消息欄は好評であった。みんなで作る会報をモットーに、次号の構想を進めている。

事業のもう一つの柱は組織の拡大である。若い人の掘り起こしに努力を続けている。

同窓会活動に刺激されて、同期の集まりも一段と活発化し、初めて開く期が生まれ、また五十年、四十年をくぎりに東京で、釧路で大きな集まりとなっている期も見られる。先輩と後輩の連絡がつき新たな出会いも生まれている。

「同窓会を軸にして、連帯と友情のきずなをしっかりと結んでゆきたい」総会あいさつを、西條会長はこう結ばれた。（六三・二記）

（湖陵三一期・石井　忠雅）

御卒業・御入学の喜こびを１枚の写真に……

湖陵・江南・北陽・星園・短大高校他

市内小中学校卒業アルバム専属作成

株式会社 工藤写真館

工藤寿男（釧中26期）

釧路市南大通５－３－７　TEL 41－5751

駐車場（20台収容）完備

昭和六十二年度

湖陵同窓会総会開催

当番期 湖陵五期・十五期・二十五期 趣向を凝らした盛り上げて

昭和ひとけた生まれの人間にとって、「青春」という言葉のひびきはいかにもまぶしい。しかしあの日、そこに渦いていたのは、まぎれもなく遠く過ぎ去ったはずの青春を再び謳歌する歓びであった。

六十二年八月九日。釧路オリエンタルホテル。六十二年度釧路湖陵同窓会は熱気につつまれた。世代を超えた一体感それは同窓会ならではの不思議なエネルギーの燃焼であった。この日のために道内はもとより、本州各地からも多くの同窓生たちが帰郷し、朋友の暖かい出迎えをうけて出席した。

校歌が流れ、やがて懐かしい応援歌がこだまして、"愛ゆかしき兄弟"たちの一年に一度の同窓会はまた新しい想い出となった。

六十二年度の当番学年として、湖陵五期、十五期、二十五期が正式に指名されたのは前年の同窓生の席上でのことである。十年前に経験はしたものの、その年にはすごい先輩たちがいて、その指示に従っていればよかった。今度はそうはいかない。そのうえ肝心の同期会が、この二、三年眠ったままになっている。大げさに云えば、一種の危機感が走った。その夜、同期の有志が緊急に集まった。まず湖陵五期会の建て直しから取り組まなければならない情けない状況だった。

四月二十一日、釧路市福祉センターで初の当番幹事会を開き、全体的なスケジュールや担当を決めた。会券をどうさばくか、懇談会のプログラムをどうするか。出席した十五期生たちからも活発な意見が出された。『先輩たちは会券の配布や寄付集めをお願いします』という後輩たちの提案に『まかせろ』と胸を張ってみせてどうやら方向が決った。懇談会のアトラクションや福引きなどは十五期生が主体となって準備することになった。しかしいざ動きはじめてみると、二、〇〇〇枚の会券の配布だけでも大変だった。釧中時代の先輩期では動静さえもつかめない人もいた。クラスごとに幹事を決めて分担はしたが、それぞれに

多忙な連中である。連絡もとれないこともあり、度重なる幹事会でも自信はつかめない。開催日が近づくにつれ不安はつのった。

そして当日がやって来た。湖陵五期は東京・札幌・北見などから駆けつけた友を加えて、前日何年かぶりに弟子屈温泉で同期会を開き、翌朝全員で総会へ向った。懇親会は特別な趣向もなかったが、遠来の出席者たちのために、釧路湿原のビデオ映画を会場に流した。国立公園指定の直後だけに好評だった。汗だくになりながら最後に六期生ら来年の当番にバトンタッチのあいさつをして同窓会は終った。朔北の釧路にしてはめずらしく盛夏を思わす暑い一日だった。

（湖陵五期　横澤一夫　記）

御卒業・御入学の
晴れの日を
歴史の１ページに…

釧路市幣舞町２番２号
株式会社 吉井写真館
代表取締役　吉　井　祥　朔（湖陵18期）
電話　41－4798番

青春譜・湖陵ケ丘（17）

釧中32期　奥田達也

幼なじみと歩き
鉄拳の嵐を受けた戦時中

同級制裁

太平洋戦争が始まっていた。日本全国こぞって一億一心、火の玉となって鬼畜米英に戦争を挑んだのである。日本全体が平和に浸り飽食にさえあきている現在から考えれば、馬鹿げたことをしたものと思う。何人に踊らされ、誰に浮かされて聖戦の美名のもとまっしぐらに進んだものか。

悔いありとすれば、これ程にバカ気たことをよくしたものである。だが、その時代には、真剣に、それが正しいと信じて軍国主義を奉じ、釧中生も進撃したのである。

それは昭和十七年の夏、夜も更けた頃、日進小学校の校庭に釧中生数名が一固まりになって同級の某君を待っていた。

当時、各地区ごとに分団が作られていた。橋南西部＝第八分団＝の上級生たちであった。

下町からゆっくり登ってきたらしい某は、息も乱さずにその群れに近寄ってきた。

「おう、よくきたな」

「逃げたかと思っだぞ」

などと一群の生徒は逸る心を抑えきれずになじり出した。

暗闇に、某は笑みさえ浮かべていつもと同じく落着いているように一群には思えた。闇の中、それは無気味でさえある。いつも慌てることのない某。両袖口の副級長の白線が夜目に浮き出てて見え、生意気にさえ映った。

「お前は一体、今のご時世をどう思っているんだ。今は＝気ヲ附ケ＝畏くも天皇陛下の号令のもと、皇族方も第一線へ軍人として戦争へ参加されておられる。我々の先輩も命を捧げ、滅私奉公この聖戦を勝抜くために戦っているんだ。

そんな時、幼なじみか何か知らんが、婦女子と話しながら歩っているとは何事か。戦地の兵隊さんに申し訳が立つか。理由のいかんを問わず、釧中の上級生として、下級生の模範となるべきものがそんなことをしてしめしがつけられるか」

某は一言の弁解もせず、じっと立っていた。中肉中背ながら当時の理想である文武両道に秀いでている。温厚でつきあいも良く、下の者をいたわり、下級生や女学生に人望もある。同級生からはキザな存在の男に思われた。

まして自分たちの出来ない女子とのつきあいなど妬ましく目障りなのである。

両親を早くに亡くし、貧しく恵まれない境遇にあって、上尾幌から釧路市へ養子に入った男である。

その同郷から出てきて看護婦をする幼なじみの苦境を相談され、持前の義侠心から両倒をみたまでのことと友人達は知っている。知ってはいながら、その時代に許されないことと、若者たちは信じていたのである。時代が違えば年令も若い。自分の正義は世の正義であり、その他の行為は全く許されざることなのであった。

暗闇に鉄拳が飛んだ。一人が殴れば他も負けじと殴る。悪を懲らしめなければ正義を示さないことになるのだ。遅れては自分も卑怯者となる。殴り倒された某を蹴る者、つまづいて折り重なる者、我も我もと取組み合う形で積み重なり学童の格闘そのものになって、誰が誰やら戦い続けた。

妬みも憎しみも汗に流れ、いつしか疲れ果てて戦いは終る。

「もう勘弁してやろうや」と一人がようよう言えば、ほっとしたように一人立ち、最後に某もふらふらしながら立ち上がるのだった。

その夜の出来事は、その想い出は、釧中時代最後の苦く、嫌な＝しかし若さが起こした＝一事件として、それに参加した同級生たちの心に残った。

某は、その後も明るく振舞い、養子先の商売を継ぐでもなく、教師となり、教え子に慕われ尊敬を集め献血の回数を誇りながら六十一年の八月二十日、六十二歳で亡くなった。葬儀に勿論、その同級生らも参列した。古い時代の苦味を噛みしめながら。

御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

政府登録国際観光ホテル・日本ホテル協会会員

釧路パシフィックホテル

中村　隆（釧中27期）

釧路市栄町2丁目6番地　☎24-8811

れんが屋★AM11:00～PM11:00

トロイカ★AM 8:00～PM11:00

パシフィックイン・八まき・八宝園

同窓会主催

第八回教育講演会

『我が郷土釧路と時代を担う若人』

講師（釧中二八期）釧路市議会議長　本間正直氏

昭和十五年、釧中に入学した当時は戦時下であり、軍事教練が学課として課せられていた。援農、工場動員等で団体生活を過ごすことによって、連帯感や忍耐力がつき、その後の自分の人生に大きく影響を与えた。士官学校、代用教員、医学と様々な経験を積んだが、水産関係の家業を継ぎ、政治の道を志すに至り、昭和五十二年、市会議員となった。

釧路の歴史を振り返ってみると、そこに多くの先人の苦労を偲ぶことができます。

第一に、サケ・マス等豊富な資源を本州に移送する必要性から「クシロ場所」として開基されて以来、佐賀県万里から三百人が移住し、特に明治二～三十年代に東北・北陸を中心に次第に人口が増加した。

第二に、石炭・硫黄精製の必要性から、春採・米町を中心に街の発展が促された。

第三に、鉄道の枕木として原生林の需要が高く、林業だけではなく、製紙業にも道を拓くことになった。

そして、現在の釧路はどうか？

高度成長によって豊かな時代を迎えた反面、例えば、物を大切にしない風潮も生まれてきた。また、湖陵の生徒も覇気がない、といった風評を聞く。

時代を担う諸君に期待することは、驕ることなく勉学に励んで欲しい事と、自分を大切にするという事である。

「大湖陵」とは、そうした期待に答えて、大きく飛躍して欲しいという精神的な意味であるから、豊かな人間性、未来を創造する叡知、何ものにもくじけない体力の三つをもとに郷土釧路を作って欲しい。湖陵に学んでいる誇りを胸に。

以上が本間正直氏に戴いた講演会の要旨です。氏には繁多の折り、わざわざ母校に出向いてのご講演、心からお礼を申し上げます。

（文責　駒木　貞）

釧路市職員湖陵会のあゆみ

事務局　関口政司

昭和四十七年九月の吉日道銀ビルの五階ホールにおいて釧路市役所職員湖陵会が設立された。この時の会員数は約二百名であったがあいにく当日は八十名程度の会員だけしか参加することが出来なかった。しかし、来賓の方々、そして先輩、後輩が一堂に会しての懇親会は初のこころみと言うこともあって最初のうちは皆んながどことなく堅苦しい雰囲気に包まれていたが、徐々ににアルコールが進むにつれ会場は和気合々となり実に楽しい一夜を過したものである。以来回を重ね昭和六十二年年度で第十六回目の総会を迎えるに至ったものである。現在は会員数も約四百人を数えるまでになったため必然的に懇親会も年々盛大の様を呈し、今では毎年人こそ変れ常に百五十人位あつまる大宴会となっている。また会員も年に一度のこの懇親会を心待ちにしているとの風評も出始めている今日此の頃である。それではこの設立に至った経過を簡単に説明してみたい。実はこの会を設立した昭和四十七年に湖陵高校開校六十周年誌の寄附集めが行なわれたのである。ご承知のように市の職員は上から下まで実に層が厚く、仕事上のつながりやあるいは個人的な付き合いなどがあることから一人の職員に何度も寄附の依頼が来たのである。このようなことから今は亡き初代事務局長の木本企画課長（当時は企画専門員）がやはり今は退職されておられる当時の初代会長の松田消防長から呼び出しを受け前記のとおり寄附の依頼がまちまちであるのでこの際市役所で職員湖陵会を結成し窓口を一本化してはどうかと相談を受け（と言うよりは半強制的に命を受けたと言うのが実態である）、木本事務局長を先頭に数人の世話役で会員の獲得を行った。その結果四十七年の設立の運びとなったものである。

現在は村田助役を五代目会長として迎え、会員の親睦と協調をキャッチ、フレーズに、また市の職員としての自覚も充分認識して両面から釧路市役所職員湖陵会を益々発展させると同時にこの会がいつまでも受け継がれて行かれるよう皆んなで力を合せて行きたいと思っております。

もっと素敵に伝えたい…。

想像から創造へのかけ橋
藤田印刷株式会社
〒085 釧路市若草町3番1号　TEL(0154)22-4165
FAX(0154)22-2546

故 豊島弘道同窓会副会長を偲んで

釧路教職員湖陵会
第十二代会長　上岡　信明

過年長月十日急逝された豊島副会長に哀悼の意を表しながら…。私共教職員湖陵会三二〇余名の代表として同窓会に出向ご活躍戴いた功績を辿ります。先生は国立教育大付属中副校長でございました。当会とのかかわりは、五十四年度第九代田村会長期に庶務幹事として、役員になられ爾来三カ年つとめられ、次いで第十代名倉会長期の五十七年度副会長に選出され第十一代中川会長そして私の代まで五年間、市教委指導室長に迎えられるまで仕事をして戴きました。

この間、三十一年同窓会第二代中川会長時代に湖陵健児団結のため会報「くまざさ」が創刊、以来休刊になっていて第七代組村会長と現遠藤幹事長にその編集一切を当会が依頼され五十四年度再刊しました。当時副会長の私ほかが五号まで扱い、次号から実に十号、同窓会幹部のご指導と豊島先生の力量によって継続され、先号より若原副会長ほかの担当で出されたのです。歩みを回顧し、茲にご冥福を祈り擱筆致します。

釧路湖陵同窓会役員名

顧問	丹葉　節郎	釧八	
〃	米内富久司	釧一二	
〃	古谷　武一	釧一三	
〃	坂下　忠勝	釧一六	
〃	米沢悟空翁	釧一七	
〃	中村　隆	釧二七	
〃	組村　眞平	釧三二	
相談役	上岡　信明	釧三〇	
〃	村田　憲治	湖一	
会長	長内　宏	湖二	
副会長	久本　甫	湖七	
〃	若原　孝夫	湖二	
〃	本間　秀一	湖六	
〃	割方　道子	湖三	
〃	原　轟戸	湖七	
幹事役	遠藤　隆吉	湖四	
副幹事長	関口　政司	湖一〇	
〃	沢田　征矢	湖一三	
会計長	山本　寿福	湖八	
会計	浜出　紘光	湖一六	
会計監査	坂上　洋治	湖三	
〃	徳田　瑛子	湖五	
〃	神　崟躬	湖八	

事務局だより

昭和六十二年度の総会も八月九日（第二日曜日）無事終了することが出来ました。例年は旧商工会館（現在のキャッスルホテル）で開催されていたものであるが、六十二年度は会館改築のため会場をオリエンタルホテルにて開催されました。従前の会場より僅かながら手狭な感じではあったがそこは当番幹事の皆様の創意と工夫をこらしての演出で盛会裡のうちに無事終了することが出来ましたことに対してこの紙面をお借りし改めてお礼申し上げます。さてそれではここで同窓会の近況についてお知らせいたしたいと思います。まず湖陵高校々舎改築問題、それに関連して同窓会館建設の問題、また同窓会名簿作成のための協力問題、さらに記念石碑の建立問題そして同窓会の最大事業である昭和六十三年度の総会開催のための下準備などいろいろの問題が山積されております。しかし一方各都市で湖陵同窓会支部の発足の兆しが現われております。既に発足をみている東京支部、そして札幌支部、帯広支部、さらに近々苫小牧支部が発足するとの情報が入って来ております。湖陵高校の学びやを巣立った仲間達がそれぞれの社会の中で立派な人間として活躍されており、これらの方々がそれぞれの立場でスクラムを組み湖陵魂を発揮していただくことは地元親同窓会としてはこのうえもない喜びであります。いま列記したように今後同窓会に残された問題は山積みでございます。これらを皆解決して行かなければなりません。しかしこれは単に役員の力だけではどうすることも出来ないのは明白でございます。会員の皆様一人一人のお力とご支援、さらには絶大なるご協力をお願いする次第でございます。勝手なお願いばかりを申し上げましたがどうか深いご理解の程を重ねてお願い申し上げる次第でございます。

同窓会名簿作成に御協力を！

ご承知の通り、六月下旬発刊を目標に新しい同窓会名簿作成の作業が継続中です。五二年に発行して以来ということもあって、皆さまのご協力にも拘らず、現在住所等の判明率はまだ七〇％程度。特に湖八期（三一年度卒）～二九期（五二年卒）あたりに不明者が多く、今後少しでも正確で使用に耐える名簿にしたいと願っております。

同期、同級の名簿など情報を是非お寄せ下さい。

あとがき

▼今年は例年になく雪も少なく、暖冬と喜んでおりましたところ、立春を過ぎてからの寒さに厳しいものが見られ、かえって身にしみる感じがします。

母校、我が湖陵高校の新校舎実現も確実となりました現在、私共同窓生はもとより、在校生一同、一日も早い完成が待たれる毎日です。

▼また、各地同窓会の結成、開催及び、各期の同期会の開催等の報も、あちこちから届けられ、今更ながら、湖陵同窓生の絆の強さを感じているこの頃です。

▼例年にも増して在校生の各部、各分野での活躍は、いつになっても我々同窓生の自慢であり、心あたたまる話題でもあります。全くすばらしいことであり心より拍手をおくります。

▼三月は学窓を巣立つ後輩諸君に心より祝福の辞を申し上げますと共に、卒業生諸君の前途に栄光あらんことをお祈りいたします。

※　編集にたずさわった人

長内　宏・上岡　信明
遠藤　隆吉・若原　孝夫
和田　信幸・千葉　吉雄
吉井　正・関口　政司